

# 文芸

## 俳句

懐手解かず話も切り出せず 池田 逸子  
 季語集の手擦れの跡や去年今年 伊藤 敬子  
 初午や烏屠の奥に紅の風 今関満喜子  
 カレンジムと一枚めぐり春近し 魚地 照子  
 戦いも災いもなく里神楽 江森 悦子  
 悴かむ手開ける雨戸の軋む声 大谷 武彦  
 朝市女悴かむ指に礼教え 川島 孝夫  
 寅年の新春を打つ古時計 向後 寛  
 悴みし幼な児の手と懐に 越川せつ子  
 今日ばかり祝一色新成人 越川 福子  
 しんと足裏の裏から寒を知る 小松 藤男  
 神棚の共げ餅運ぶ嫁が君 佐瀬 輝夫  
 振ってみるチロルの鈴や雪景色 宍倉 道子

悴みて他人のごとき手足かな 鈴木とし子  
 焚火の輪笑いの渦と化しにけり 玉虫 栗扇  
 しらじらと明け来る厨悴む手 土屋美枝子  
 畦道の夕焼け小焼け悴む手 土屋 義昭  
 野焼きする煙の中の人黒く 戸村 静菫  
 この道は春へ通じる切り通し 早川 勇

## 短歌

口ボットが銃持ら迫ると犯人は 腹這ひになり逃げ出してゆく 池田 春江  
 冬枯れの栗山川の土手下に 釣り人浮きを見詰めてみたり 八角 三枝  
 陽の温みたつぷり吸ひし里胡麻は ささやき乍ら瓶に落ちゆく 青木 秀子  
 鉾立てる辛夷の荅大寒の 最中もややに丸味ましくる 佐瀬 初音  
 寒肥とば撒きたる傍への蛇の脱は 碧き至実の艶めき増せり 鈴木まさ子  
 大寒の最中なれども小松菜は 葉の色深め育らゆくなり 押尾 輝子

「寒いね」と言ひ暖かき赤飯と 嫁の持ら来ぬ大寒の朝 吉岡 信子  
 初詣でのかがり火囲み友達と 昔話に花が咲きたり 平山 芳子  
 草取りし夜半に手・足の筋肉痛 独り揉みつつ耐へぬにけり 田崎 尚美  
 わが町の九十九里浜海の碧 空の青さを立に見てみつ 西山満里子  
 組に切りゆくオクラの散りばふに ふとも夜空の星と思へり 芹川 初子  
 山茶花の咲き盛りたる明るさが 枯れし芝庭照らしぬるなり 島田ますみ  
 幽かなる靴音音聞きて歩みゆく 上総に珍らの淡雪降りぬ 齊藤つね子

捨て水の忽ち凍る朝の庭 思い出よこぎる大陸の冬 伊藤 定男  
 悴む手落ち葉焚きしてあためたためし 沓き日懐かしい八十路となりて 土屋 好  
 竿に干す洗濯物に木枯らしが 妻の手足を温かさ取り去る 越川 良則

## こうほう博物館 24

### 中世の茶臼

坂田城跡の西の田んぼを隔てた台地に、鍛冶屋台遺跡がありました。この遺跡は銚子連絡道路を造るため、平成十四年から十六年まで発掘調査され、旧石器時代から中世の遺物や遺構が発見されました。その中で中世の穴から、丸く平べったい石が出土しました。

このような茶臼は町内では篠本城跡から数点出土していますが、いずれも破損している、鍛冶屋台遺跡のもののように壊れていないものは、全国的にもまれな例です。しかし、下臼のみで上臼が見つかからなかったのはなぜか、これだけでは用が足さないうのに、何のために遺跡に残されたのか、などを秘めた大きな遺物です。

石は直径44cm、高さ13.8cmを測る漬物石のような大きな石で、皿のよう加工され、中央に穴が開き、その穴の周りが一段高くなつて、放射状に筋が入っています。石材は砂岩で、おそらく銚子産と思われる。この石は、茶臼と呼ばれる中世に中国から伝わった茶の葉を粉にする道具の下の部分で、下臼と呼ばれるものです。中央の一段高い部分に円筒形の上臼が載り、その上臼に穴が開いていて、上臼を回しながら穴か



▲出土した茶臼